

都内唯一の屋上観覧車 再開



幸せの観覧車

外観は二代目「グレ太の観覧車・フラワーホイール」から色彩のみを変更し、ゴンドラはこれまでで赤・橙・黄に青や緑など九色で彩られ、本体は茶色で自然をイメージしたそうです。なお屋上広場は「かまたえん」と決定したそうです。一時休止するまでの四十六年間にわたって「蒲田のランドマーク」として知られており、幸せの観覧車も「多くの人に幸せを届け、愛され続けることを期待しています」とのことです。

前々回号で東急プラザ蒲田の屋上にある観覧車が休止かとの記事を掲載しましたが東急ビルのリニューアル後の十月九日に再開されました。近隣の方々の復活してほしいとの要望が数多く寄せられたことで東急プラザも存続を決めたとのこと。再開にあたっては新しい名称を公募して、約三千通の応募の中から「幸せの観覧車」と決まり無料パスが贈呈されたそうです。



マイクロEVキッチンカー

ビルの屋上には観覧車のほか「eコロイド」という東急電車のカラーリングを模したライドを足でこいで運転する乗り物や、ミニバスを使った世界最小のマイクロEVキッチンカーが食事を提供しています。その他「風の丘」という元気な子供たちの歓声でいっぱい飛び跳ねて遊ぶ空気膜用具のトランポリンや、「プラザカーニバル」という四種の楽しいゲームが楽しめます。

筆者の思い入れですが、親子三代にわたり乗ったことを懐かしむ方や初めて乗った方もいらつしやいます。これからも、買い物ついでやお孫さんと楽しまれるおじいちゃん・おばあちゃんやご両親のためにもぜひ長く続けていただければ幸いです。羽田空港の国際化が進んでいる中、蒲田周辺を活気付ける意味でも観覧車が目玉となるよう近隣の方々もお知恵・お力をお貸し頂ければと思います。

(取材 飯嶋、伊藤、下山委員)

編集後記

蒲田西地区の花が決定しました。このたび、18色の緑づくり事業が始まることとなり、大田区内の各地区で花の選定がされました。春と秋でそれぞれ花が選ばれ、春は「マリーゴールド」、秋は「ガーベラ」となりました。先日、各自自治会・町会へ種をお配りしたところ、道路沿いや身近な所に色とりどりの花が咲くのが楽しみです。

蒲田西特別出張所管内

人口	男	31,728人
	女	29,370人
	計	61,098人
世帯	33,957世帯	

平成26年11月1日現在

かまにし17をお読みいただき、ありがとうございます。情報紙に投稿などのご意見やご感想、または気軽に事務局までご連絡ください。事務局 蒲田西特別出張所 大田区西蒲田七一二一七(三七三二) 四七八五

平成26年12月1日発行

かまにし

第54号

発行 地域力推進蒲田西地区委員会
編集 地域情報紙編集委員会

わがまちの顔 現代の名工 「表具師」



春原 敏雄さん

すのはらとしお
いが最後まで仕上げ、決して途中で投げ出さない子供だったそうです。

約束の時間に、ガラスの引き戸を開けると土間に「春原」と焼印の入った雪駄と主である表具師春原さんが笑顔で迎えてくれました。削ったり、切ったり、叩いたりする大小の道具、大量の和紙、正絹の裂地、桐のタンス二棹には小物が種類別に整理されています。(ていねいな仕事ぶりがうかがえます。)襖、掛軸等に囲まれた無垢の檜の板の間は糊のついた雑巾で拭くせいか黒く変色しています。そんな仕事場でお話を伺うことが出来ました。

昭和二十二年長野県上田市、農家の三人兄弟の末っ子として生を受けました。勉強大好き、そのかわり物作り大好き。器用ではな

表具師とは和紙や裂地を使って襖や掛軸、屏風などの装丁や修復を手掛ける職人です。床の間に掛ける軸にも決まりごとがあります。自身の絵を引き立てるように表具の柄を選び、それなりの小物で飾って仕上げます。紐一つにしてもピンからキリまであります。一般家庭だけでなく寺社や文化財建築の襖は槽組(ほたぐみ)の上に九枚の下張りを重ね十枚目に表紙を生麩糊を使って仕上げます。いい物を作りたい、一心で材料・道具には目がなく、いい物を見ると欲しくなってしまうそうです。根気のいる仕事です。

子供のころの「投げ出さない」性格が発揮されています。第五十五回表装展都知事賞を受賞した作品は



第55回表装展東京都知事賞

(取材 佐藤、久保村委員)

あじろの紙にへびのうろこの模様をイメージしてピンセットを使って模紙を編み込み、オリジナルの台紙を作って掛け軸に仕上げた作品です。今は仕事が激減しており技術を伝えていく事がむずかしくなっています。表具内装文化協会訓練校の教務主任をまかされておられる「現代の名工」として後進に技術を惜しみなく伝授されている毎日でもあります。皆さんに助けられていただき、今があります。自分のペースで仕事が出来たのも家内のおかげです。と奥様に感謝していました。

- 受賞歴
- 二〇〇〇年 六月 第三十六回表装展東京都知事賞
 - 二〇〇二年 七月 東京都伝統工芸士「江戸表具」認定
 - 二〇一一年十一月 東京都優秀技能者「東京マイスター」知事賞
 - 二〇一二年十一月 厚生労働大臣卓越した技能者「現代の名工」
 - 二〇一三年 二月 第五十五回表装展東京都知事賞

安方町から五輪出場選手が 馬術 太田邦宏さん

安方ってどこ？ 太田さんって誰？

文化年間（一八〇四〜一八一八）に二十四戸、明治七年（一八七四）には二十六戸と記録が残っている安方村は、現在安方北町会と安方南町会に分かれ昔の地名を残しています。太田邦宏さんは昭和二十年四月十五日の空襲まで安方町（現在は多摩川一丁目三十一番地）に住んでいました。太田さんは矢口東小学校から



東京中学校（現在の東京高等学校）に進学します。

東京中学校とはどんな学校？

東京中学校は一八五四年に江戸で生まれた上野清氏が漢学を修め、数学を学び、数理を研究した後、明治五年に十八歳で開いた「上野塾」が前身となる歴史ある学校で、昭和九年に神田から現在の大田区鶴の木に移転したばかりでした。

東京高等学校「校史」馬術部のページに次の通り書いてあります。

馬術部

学校の校庭に隣接した北側に馬術クラブがあつて、乗馬が盛んに行われていた。その影響と環境とが相まって、中学校としては珍しい馬術部が設けられ、練習にもいろいろと便宜を受けていたのであつた。次のような昭和十三年の活躍が校報に載せられているが、こうした部員の中からオリンピック代表の二選手が生まれたことは特筆すべきことであろう。

東京中学校の馬術部からオリンピックに二人も送り出していたんですね。その一人が太田邦宏さんです。

馬術部のページ（続く）

「昭和十三年八月五日土官学校下馬場において挙行された全国中等学校馬術競技大会に、井上晴夫（四B）岸英一（四B）小口敏太郎（三C）の三選手が初陣し、力線の結果学習院、慶応普通部の強剛を破つて全国第五位、関東第二位という好成績を収め、太陽のようにその存在を校の内外に輝かせた。

五月二十日我が部の指導をなされていた小峰先生が応召入隊せられ、その後は星先生のご監督のもとに倶楽部の方々の指導によって部員一同一致団結もつて小峰先生の期待にそむかぬよう努力し、全国第一位を目指して猛練習を続けている。我が部は毎週三回の練習、春秋二期の遠乗会や競技会を行い、夏は多摩川清流に舟を浮かべて水泳を行うかたわら水馬の練習を行っている。本年秋期遠乗会は十一月四日に参加者十名三池総持寺方面に行った。

なお十二月四日代々木ヶ原で行われる全日本乗馬大会の少年班には井上、小口、佐々木、山崎、喜多井の五選手が派遣されることになっている。（主将：井上記す）」

最後に名が出た喜多井明選手（昭和十七年卒）は、我が国が戦後初参加の昭和二十七年第十五回オリンピックヘルシンキ大会に馬術選手として出場し、次の昭和三十一年第十六回オリンピックメルボルン大会には太田邦宏選手（昭和二十五年卒）が同じく馬術選手として出場している。



東京中学校 校章

ご紹介した最後に太田さんのお名前が出てきます。オリンピックに出場された時には久が原に住んでいたそうです。

東京中学校の校章は創立者である上野清氏が考案しました。明治四十年に東京中学校を卒業し「路傍の石」「真実一路」など優れた作品を著した作家・山本有三氏はこの校章に強い愛着を持っていたと言われています。

太田さんは専修大学へ
太田さんは東京中学校を卒業すると専修大学に進学します。
専修大学のホームページには次の通りあります。

専大スポーツ

オリンピック大会出場者一覧
八十一年の歴史を誇る専修大学体育会は、過去のオリンピックにも数多くの選手を輩出してきました。晴れの舞台上で活躍した選手たちを挙げてみました。

（◆印はOB、OGとして出場）

- 【夏季大会】
- 大会 第十六回メルボルン大会
開催年 一九五六年（昭和三十一年）
出場選手 ◆太田邦宏（馬術）
- 競技種目・成績 大障害三十位
-
- 大会 第十七回ローマ大会
開催年 一九六〇年（昭和三十五年）
出場選手 ◆太田邦宏（馬術）
- 競技種目・成績 大障害（大賞典障害）二十九位 団体十五位

これが専修大学のホームページの太田さんに関する記事です。
二回連続して、オリンピックに出場するというのは、大変なことだったと思います。



東京中学校馬術部（昭和15年）

もつと太田さんについて調べることができないか、いろいろ考えてみました。

再度東京高等学校へ

先程紹介した東京高等学校の「校史」に次の記載があります。

OBの部

昭和三十一年二月十日、メルボルンオリンピック馬術代表として練習のためストックホルムに向かう本校出身の太田邦宏選手が送別会に出席かたがた馬術披露のため、相川監督以下同期生とともに来校、各種演技

を展開して、地元嶺町小学校の児童や付近の人々多数も見物にきた。なおちなみに、ヘルシンキオリンピック大会にも本校出身の喜多井選手が出場している。

（中略）

昭和三十一年の太田邦宏選手の来校と馬術演技披露を伝える学校新聞記事は、次のように記している。

「本校出身太田選手、五輪馬術に出場。出発前の二月十日（金）、相川監督と共に来校し馬術演技を披露。当日は披露される馬術障害飛越のため練習馬トップ番号と障害器物とを用意して来校した。簡単なあいさつの後、みごとな馬術演技を展開して、地元の嶺町小学校や付近の見物人等を沸かせた。終了後会議室において交歓会が行われた。記者も同席し、その一端を拾ってみた。

太田選手は「オリンピック競技会までの練習期間は二か月間ある。外国の選手は馬を三頭ぐらいい持っているので安心して使えるし、またフランス等では年に二百回もの大会があるので、精神的に楽ではないか。自分分は馬が好きだったので、戦争中よく疎開先の茨城から抜け出し馬に乗りに来た」等、数々の思い出を語られた。

（中略）

なお、我々の質問に、

『あれは昭和十九年頃だったかな。東実の上野熊蔵校長の馬が二頭いてね。多摩川乗馬クラブというのがあったんですよ。それに先輩もたくさんいたので、すいぶん練習したものですよ。そう馬舎は今のテニスコートのあたりにあったんですよ』

経歴について

『僕は二十三年に専修大に入り二十八年卒業したが早大、立大にも東中出身で馬術部の人がたくさんいるよ。そうそうヘルシンキのオリンピック大会に出場された喜多井選手も先輩ですよ。帰国後体を悪くされて東村山で療養されていますよ』

終始ニコニコ顔の太田選手も昔を思い出されてか懐かしそうに話続ける。

（中略）

（二月二日）

ご本人にお会いして、お話を伺いたかったのですが、オリンピック協会、日本馬術連盟、東京高等学校、専修大学、全ての事務局から「連絡先はわからない」と言われ、唯一、専修大学OBの方から「かなり前から欧州に住んでおり連絡先はわからない」と教えていただきました。そのようなわけで客観的資料のみで本稿を作りました。

（取材 大良・都築委員）